

●「あなたが書けない本当の理由」とは？

書けない・・・どうしても書けない。時間が足りない。体がだるい。頭が重い。それどころか、今日は腰まで痛い。他にやることが山ほどある。ああ、今日も書かないまま一日が過ぎてしまった。矢のような催促が来ているのに・・・。

そもそも、原稿さえ書かなくてもよいならば、学者ほどよい商売はない。大いに読書して知的刺激を受け、有望な学生を教育し、ハイレベルな人達と談論風発し、講演をこなして拍手され、コーヒーやワインを片手に外国人と交流する・・・。

学内や学会の雑用はあるけれど、そういうのは誰でもやらなければならないし、たいいていの雑用は、締め切りまでには終わっている、終われば消えてしまう、という感覚である。ところが原稿だけは全然違うのである。将来できるかどうかもわからないものを自ら引き受け、しかもいったん活字になったら、どんな間違いを犯しても二度と直せない。何度も爆発する時限爆弾を次から次へとポケットに入れるようなものである。

それでも私は書かねばならない。でも書けない。いったい何が私の筆を止めているんだ？世界中の人達が私の執筆を邪魔しているんじゃないのか？なんで徹夜しないといけないんだ？どんなに短い、簡単な文章でも、楽に書けたものはひとつとしてなかったのに、なぜ私は原稿を書くことを引き受けてしまうのだ？こうして「真剣に考えたら病気になる」という理由で、私はそのうち考えることさえ忌避するようになっていった。

そんな十数年前のある日、子供を連れて訪れた地元の公立図書館で手に取った本が、スーザン・ショフネシー著・宮崎伸治訳『小説家・ライターになれる人、なれない人—あなたが書けない本当の理由—』同文書院、1998年、であった。そこには、まさに「書き手の臍にしみわたる名言」が書き連ねてあった。

その後、私はこれらの言葉を時折見返し、また行き詰まっている共同執筆者にメールで送るなどしてきた。「このメールを打ち出して、パソコンの脇に貼り付けています」とか「この本、買おうかと思います」とかいう返信を何度ももらった。紹介しよう。

「ノアの箱船は素人が造りました。タイタニック号は専門家が造りました。ですから専門家を待たないように。」（マレイ・コーエン）

「できると信じて、できないと信じて、あなたは正しい。」（ヘンリー・ロッド）

「人生の大切な取り引きの場で（実際は将来に関わる取り引きすべてにおいて）私たちは大きな賭けをしなければなりません。重大な決心をするとき、職業を選ぶとき、結婚を申し込むとき、投機の契約を結ぶとき、本を書くとき——一言で言えば重要な結果をもたらす何かをするときはいつも——最善を尽くさなければなりません。そしてほとんどの場合、

私たちは証拠が不十分であるにも関わらず、行動しなければならないのです。」（ジェイムズ・フィッツジェイムズ・スティーブン）

「どうやってするかって？ 手探りでやるだけさ。」（アルベルト・アインシュタイン）

「熟考するための時間をとりなさい。しかし、行動を起こすときが来たら、考えるのをやめて行動を起こすのです。」（アンドリュー・ジャクソン）

「もしもあなたに外聞をはばかる秘密があるのなら、それを書きなさい。」（キャロリン・マッケンジー）

「どうしても前に書き進むことができないところがあります。そこには『知られたら恥ずかしいこと』があるのです。」（デイビッド・ホワイト）

「価値のある仕事を一つでも最後までやり遂げたら、それは途中で投げ出した仕事の五〇倍くらいの価値があります。」（B・Cフォーブス）

「知っているだけでは充分ではないのです。決心するだけでも充分ではないのです。実際に行動を起こさなければならないのです。」（ゲーテ）

「私は図書館にいるのが嫌いです。なぜなら図書館にいと、いつも、自分に何か不足しているという感じがするからです。」（ピーター・ケリー）

「あなたの夢を小馬鹿にするような人からは離れていなさい。器の小さい人は、いつも人を小馬鹿にするのです。しかし、真に偉大な人は、あなたも偉大になる可能性のあることを教えてくれます。」（マーク・トウェイン）

「ライター役割は、他の人が言えることを言うことではなくて、言えないことを言うことなのです。」（アナイス・ニン）

「大きなことを成し遂げようと思ったら、安全など望んではいけません。」（タキトウス）

「本を書くとき、最後の三分の一は、全体の十分の一くらいの時間で書けるのです。自信が生まれるからそうなるのか、選択肢が少なくなるからそうなるのかは分かりません。」（ジョーゼフ・ヘラー）

「自分自身になること、そして自分の理想とする人間になること、それが人生の唯一の目的です。」（ロバート・ルイス・スティーブンソン）

よし、もう一度勇気を振り絞って書き始めよう。それにしても、原稿を書かなければならないにも関わらず、自分のホームページにこんなエッセイを書いている私は、やはり問題なのかもしれない。編者の皆さん、ごめんなさい。必ず書きますから。

2013年8月16日 記